

## 第10章 中世の遺構・遺物

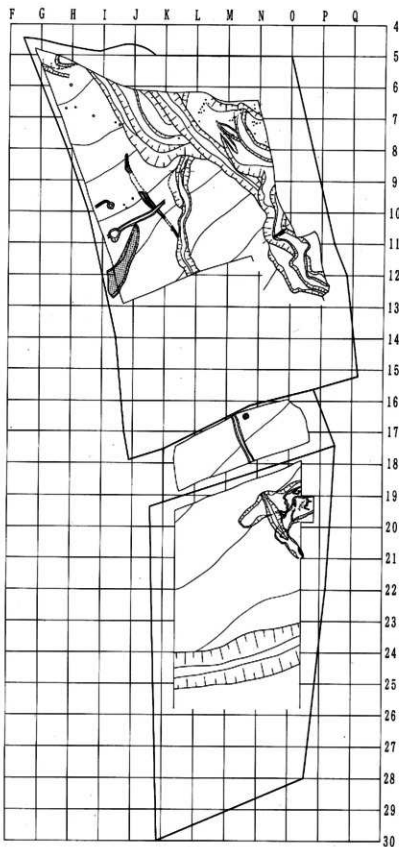
## 第1節 遺構 (山本)

## 1. 北区の遺構

この時期の遺構は、主に北区北半部を中心とする砂堆ベース上に広がっていた。北東部では、掘立柱建物を2棟検出した。大きいもの(SB001)は4間(8.0m)×2間(5.2m)を計り、南北に細長い配置である。小さなもの(SB002)は2間(3.7m)×1間(1.8m)で、東西に長い配置である。それぞれの柱穴の芯々距離は、SB001の桁間2.8m、梁間3.5m、SB002では共に2.7m程度である。

2棟の掘立柱建物は、共に規模が大きく異なり、長軸方向についても異なるものの、位置的にも非常に近く、配置的にもほぼ垂直の軸線にあることから、同時期か若しくは非常に近い時期の建物と見て良いと考えられる。

調査区北西部では、井戸(SE001)を検出した。砂層上に構築された井戸は、北西側から南東側へ向かって倒壊した状態で検出した。後に述べる波状化現象との関連が指摘でき、大規

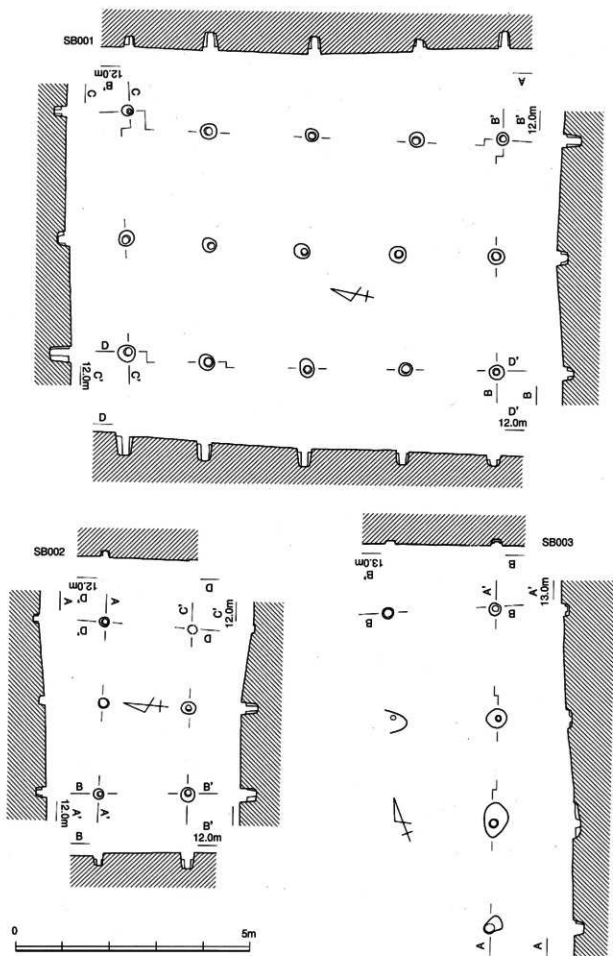


第334図 中世遺構配置図

第1節 遺構

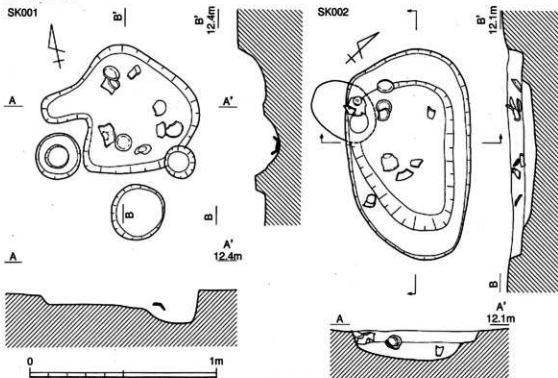


第335図 北区中世遺構



第336図 北区中世獨立柱建物跡 (SB001~003)

第1節 遺構

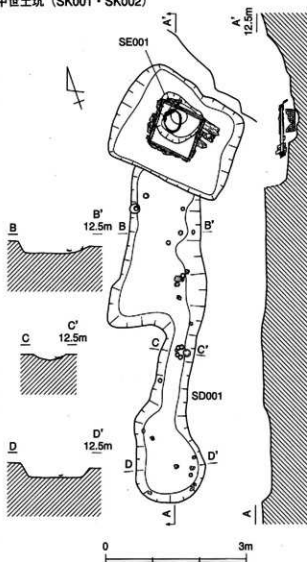


第337図 北区中世土坑 (SK001・SK002)

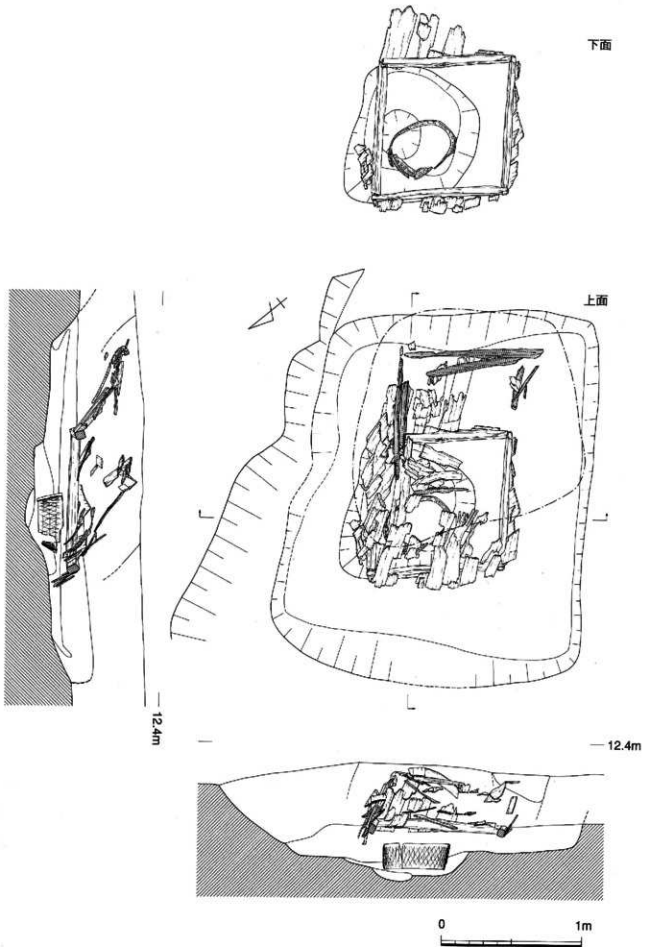
模な地震の影響によって、上部が流動し、傾いた状態になったと考えられる。

S E001の掘形は長辺135cm × 短辺110cmのやや歪んだ長方形である。断面形は井戸枠内側を1段浅く掘り込むことから、2段掘りに成っている。検出面からの深さは、上段(外側)で10cm、下段(内側)で20cmである。倒壊した井戸本体は駒組みした横棧を四辺に配し、周りを縦板で囲むタイプ(方形横棧縦板型)で、横棧内側の一段深い部分には直径50cm程度の曲物が据えられていた。検出状況から井戸の上部構造の復元は困難であるが、井戸検出面において横棧の一部と考えられる木材が出土している事から、少なくとも2段以上の横棧をもっていたことは想像できる。また、縦板の中でも大きなものには駒穴をもつものも存在し、転用材としてこの井戸枠に用いたものと考えられる。

このS E001から南に向かって、S D001がのびている。幅40cm~100cmで、検出面からの深さは10~30cm程度である。S E001との位置関係から、井戸の付属施設の可能性が

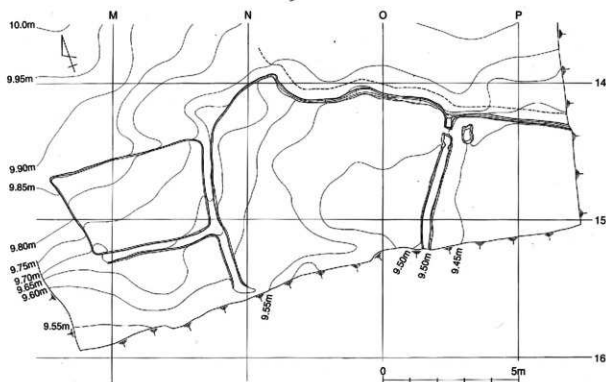


第338図 北区中世遺構 (SD001・SE001)



第339図 北区中世井戸 (SE001)

## 第1節 遺構



第340図 北区中世水田跡

高い。「洗い場」や排水路などの用途が想定できる。また、この溝埋土中からは土師器皿を中心とする土器群が、広い範囲で出土している。比較的完形が多く、数カ所にまとまって出土したので、人為的な施業行為が想定できる。

I10区～I12区付近では、2条の溝を検出した。S D002・S D003である。S D002は幅100cm程度で、東西にやや蛇行しながらのびる。S D003は、幅約200cmを基本として南北に延びているが、途中で幅80cmの溝が分岐して、二股になる。この溝の北端はS D002に切られる。2条の溝の内、S D003からは、大量の製塩土器破片が出土した。これらの溝と大量の製塩土器片との関係は不明であるが、この遺跡の土器製塩の存在が窺える遺構である。

また、北区南半部側のL14～P14・L15～O15区付近では、水田跡を検出した。東西、南北にのびる小畦畔が付設する。西方には5m×4mの小区画水田があり。東方には7m×8mのやや大型の水田が存在する。東方水田畦畔の水口付近には土器の破片が出土したが、時期を特定するには至らなかった。近隣の遺構や土層の状況から、中世末ごろのものと考えられる。

北区北部では、後述する液状化による噴砂跡を検出した。南北15m（6ラインから9ラインまで）、東西30m（IラインからOラインまで）の範囲で確認できた。いずれの噴砂も南北方向を向いている。噴砂跡は、長いもので、7m程度不連続ながらつながっているものもある。噴砂の分布図を弥生時代～奈良時代にかけての流路の範囲を重ね合わせると、ほぼ一致する事が分かった。噴砂の断面観察の結果、噴砂の供給砂層はこの流路を埋めた砂層であることが判明した。噴砂の向きや、それを起こした地震の規模、噴砂が突き破った当時の地表面を考慮した結果、伏見地震（1596年）である可能性が高いと判断された。

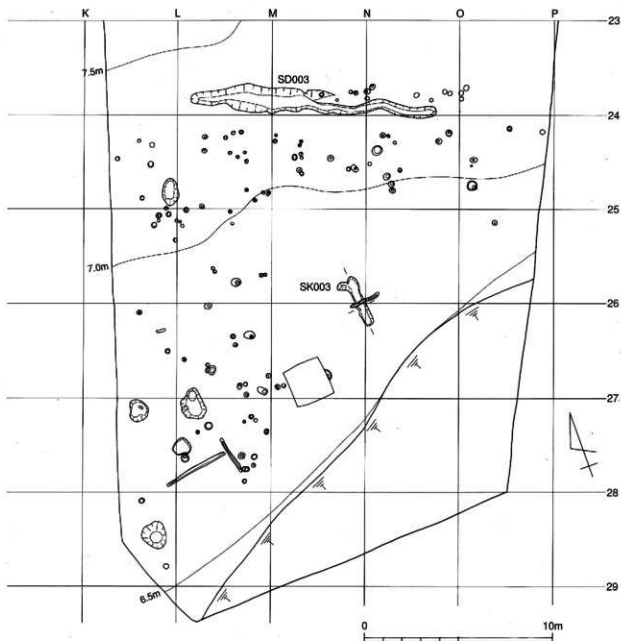
以上、中世の遺構は北区の特に北半部を中心として配置である。検出したS B001・002等の建物や井戸、それに近接する溝及び土坑等は、集落を構成する遺構としての一端を担うものであるが、本遺跡に

における中世集落の全体の把握するまでには至らなかった。しかし、掘立柱建物と井戸の近接する位置関係と、その南側傾斜地からの建物遺構が検出できない事から、中世集落の広がりが調査区外、特に北側での存在が想定されるのである。

## 2. 南区の遺構

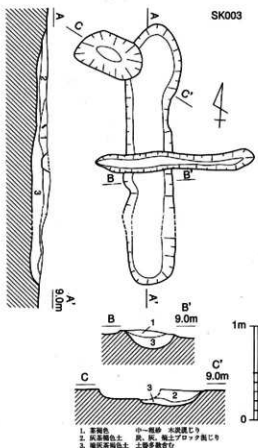
南区の遺構は低地に近い24ラインに東西に平行する溝から南側に集中して検出された。遺構としては土坑5基、柱穴80箇所、溝などを検出した。

土坑の内SK003は、M25～26区にあり、長さ270cm、幅50cmで、深さは20cm程度の溝状を呈するものがあった。埋土は単一の土層の堆積であり、この土層には多くの炭・灰・焼土のブロックが混在していた。この土坑において直接火熱による影響を受けたのではなく、二次的な堆積土中からの検出である。



第341図 南区中世遺構

第1節 遺構



第342図 南区中世土坑 (SK003)

この土坑は南区でも柱穴などの遺構が比較的多く存在する地区から離れており、建物群の周辺部とかがえられるが、この土坑の性格は不明である。また柱穴の配列から建物を復元するには至らなかった。

北区では掘立柱建物跡や井戸などの明確な遺構が集中する一方、南区でのこの時期の遺構は疎らであり、北西部の山塊を背景にこの扇状地上に中世集落が点在していたことが付近の遺跡の状況からうかがい知ることができる。出土遺物等からは官衙・その他性格を特定するような遺構・遺物は出土しなかったことから、中世農村村落の一端を発掘したのかもしれない。



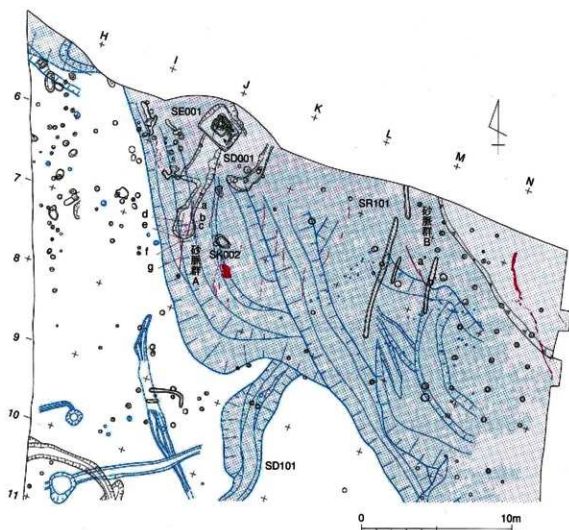
## 第2節 液状化跡

(深井・深江)

北区の第1検出面である中世遺構の検出時に多数の砂脈を検出した。検出場所は扇状地上の北区IラインからOライン付近の約300平米におよぶ。砂脈の広がりには北区北西付近に一つのまとまりがあり、北区北付近は散漫であり、北区東付近ではまた集中する。砂脈を検出した土層は近世の耕作土を除去し、中世までの土層である北区2-1層の掘削時に検出されていたが、色調が明確になる北区2-2層上面まで掘削し、精査を行なって全体に分布状況を把握した。砂脈の分布状況は北区東寄りでは比較的大規模なものを含めて30数本が検出された。その中でも特徴的なものはI-6区のもの(図版39-1)で、中世遺構の黒色堆積土を引き裂いた白色系の砂は明確にその存在を表している。また砂脈ではなく、楕円状に噴出したと考えられる液状化跡と考えられるものも存在した。中央付近の砂脈は特に太いものがあり、断ち割った。東寄りでも中央と同様である。砂脈の中で最大のものは幅7cm、長さ250cmであり、最小のものは幅1cm、長さ20cm、であり、平均的には幅2cm、長さ100cmのものが多数を占める。

噴出したと考えられる砂は地区により、若干違い、灰色細砂のものとは灰褐色粗砂のものがある。

これらの砂脈は今までに報告されている液状化による噴砂現象であると考え、寒川旭氏に依頼願って



第343図 北区中世末液状化跡

## 第2節 液状化跡

教示をえた。その結果、明らかに液状跡であるということから、3箇所にて断ち割りを行い、噴砂の供給源の追求と微地形における発生の関係を考えて。

その結果、砂脈群Aでは、検出された面から下層40cmにて同質の砂層があり、そこから砂が供給された噴砂現象がみられ、液状化跡であることが判明した。またこの地点の他例としては検出された面から下層50cmと100cmに同質の砂層があり、その二つの層が液状化した例であることが判明した。

いずれの断ち割り地点においても、噴砂の供給源が明確になった。これらの中で浅いものは検出面から30cm下面にて、深いもので100cm下面であることが判明し、液状化跡であることが明確になった。

これらの液状化跡は近世の耕作土に覆われ、噴砂の盛り上がりは見えないものの、中世（平安末～鎌倉）面を引き裂いていることから、中世から近世初頭までの間に生じたものと考えられる。

また、I-5区において傾いた状態の井戸を検出した。この井戸は隣組みした横棧を四辺に配し、周りを縦板で囲む方形横棧縦板型の井戸である。検出面から下部の発掘が進むにつれて、中心部が西側にずれており、底面はほぼ原位置を保っているようであった。この井戸は単に東側に倒壊し埋没したものと理解していたが、調査後に寒川氏の検討により、井戸の倒壊状況等から判断して、液状化現象に伴う側方流動であることが判明した。同例としては神戸市住吉宮町遺跡23次調査の奈良時代の井戸例がある。詳細は第12章第15節の寒川氏の論考に詳しい。

## 第3節 土器

(深江)

個遺跡における中世の遺構は、北区から南区にわたって全体に点在するが、前節で述べた通り集中的に展開しているのは、北区の特に北半部を中心とした部分である。また、出土遺物についても前述の遺構に共伴するものを中心に多量の遺物が出土している。

## 土師器小皿 (1300~1313)

1300~1307は、S D001出土の小皿である。1300は、底部から直口気味に開くタイプである。底部は、回転ヘラ切りである。口縁部は回転ナデで、底部内面に仕上げナデを施す。1301は、底部付近で若干屈曲を持ち、やや内彎しながら開く。底部は回転ヘラ切りである。口縁部及び内面は回転ナデ調整で仕上げる。1302は、薄い底部から肥厚しながら開く口縁部を持つ。底部は回転ヘラ切りで、口縁部から内面は回転ナデ調整で仕上げる。1303は、直口気味に短く開く。底部は回転ヘラ切りである。口縁部から内面は回転ナデ調整で仕上げる。1304は、浅く内彎気味に開き、底部は回転ヘラ切りであるが、分厚い底部にはヘラ状工具による段が残る。口縁部から内面は回転ナデ調整を施し、内面の中程には仕上げナデを施す。1305は、やや外反気味に短く開く。底部は回転ヘラ切りで、口縁部から内面は回転ナデで仕上げる。1306は、直口気味に短く開く浅めのものである。底部には糸切りの痕跡が残る。口縁部から内面は回転ナデで仕上げる。1307も直口気味に短く開く浅めのものである。底部には糸切りの痕跡が残る。口縁部から内面は回転ナデ、また内面中央には仕上げナデを施す。

1308は、S K001出土の小皿である。器形は、底部からやや外反しながら長めに開き、底部は回転ヘラ切りのあとナデ調整を施す。口縁部から内面は回転ナデ調整で、内面中央は仕上げナデを施す。

1309は、S K002出土の小皿である。器形は、底部付近で小さな段を持ちながら、やや内彎気味に開き、底部は回転ヘラ切りである。底部付近の小さな段はヘラ切り時についたものと考えられる。口縁部から内面は回転ナデ調整で仕上げる。

1310と1311は、S K003出土の小皿である。1310は、分厚めの底部から直口気味に開き、口縁部微妙に外反する。底部は回転ヘラ切りで、底部付近にはヘラ切りの痕跡が残る。口縁部から内面は回転ナデ調整で、内面中央には仕上げナデを施す。1311は、底部から直口気味に大きく開き、底部は回転ヘラ切りである。底部付近にはヘラ切りの痕跡が残る。口縁部から内面は回転ナデ調整で仕上げる。

1312は、分厚めの底部からやや外反気味に開き、底部は回転ヘラ切りである。口縁部から内面は回転ナデ調整で、内面中央には仕上げナデを施す。

1313は、丸底気味の底部から緩やかに立ち上がる口縁部を持つ。器壁は薄く、底部付近に指頭圧痕を残す手捏ねである。器面調整は、口縁部にヨコナデを施す以外は不定方向のナデで仕上げる。他の小皿と比較しても、明らかにつくりが異なっており、或いは時期を異にするものとも考えられる。

## 土師器托状小皿 (1314・1315)

1314は、S D001出土のものである。器形は、中実の高台にやや外反気味の浅い小皿を付けたものである。底部は糸切り痕が残る。その他はナデ調整で仕上げる。

1315は、高台部と皿部との接合部がややくびれのきつい器形を呈し、接合部分では接合痕も残る。皿部は、内面中央で僅かに窪み、そのまま僅かに外反しながら開く。底部は糸切り痕を残し、その他はヨコナデ及びナデ調整で仕上げる。

## 土師器皿 (1316~1317)

### 第3節 土器

1316は、S D001出土のものである。やや丸味を持つ平底から直口気味に緩やかに立ち上がり、口縁端部で微妙に外反する。底部は回転ヘラ切りで、体部外内面共に回転ナデ調整で仕上げるが、底部内面は指ナデ調整を施す。

1317は、柱穴内出土のものである。薄めの平底から、やや肥厚しながら直口気味に開形態を呈する。底部は回転糸切り痕が残り、体部外内面は回転ナデ調整を施す。また、外内面のほぼ半分には黒斑が残る。

#### 土師器坏 (1318)

形態は、平底から直口気味に開き、全体に厚手のものである。底部は回転ヘラ切りで、体部外内面共に回転ナデ調整で仕上げる。特に体部下外面にはナアの単位が明瞭に残る。

#### 土師器托 (1319)

1319は、柱穴内出土のものである。台形状を呈する中実の高台に逆円錐形の深い皿部が付く。器形全体が磨減で調整が明瞭でないが、底部には糸切り痕が残り、その他の部分については、回転ナデ調整で仕上げている。

#### 土鍾 (1320・1321)

1320は、S D001出土のもので完形品である。比較的大きい管状土鍾で、外面に丁寧なナデ調整を施す。また、管状部分は棒状工具に粘土を巻き付けて、整形後引き抜いたものと考えられる。

1321は、1320と比較すると若干小型の管状土鍾で、須恵質のものである。技法的には同様であるが、器面調整は指押さえ痕跡が全面に見られ、最終調整の相違が看守される。

#### 須恵器小皿 (1322・1323)

1322は、S D001出土のものである。平底から内彎気味に立ち上がり、口縁端部でやや外反する。底部は回転糸切り痕が残り、体部外内面は回転ナデ調整で仕上げる。

1323は、S K001出土のものである。薄手の平底から内彎気味に立ち上がり、口縁端部でやや肥厚しながら微妙に外反する。底部は糸切り痕が残り、体部外内面は回転ナデ調整で仕上げる。

#### 須恵器碗 (1324~1326)

1324は、柱穴内出土のものである。器形は、丸味のある平底から直口気味に大きく開きながら立ち上がる。底部は糸切りで、体部外内面共に回転指ナデ調整で仕上げる。

1325は、小さめの平底から直口気味に大きく開きながら立ち上がる。底部は糸切りで、体部外内面は共に回転ナデ調整で仕上げる。また、口縁端部には重ね焼きの痕跡が残る。

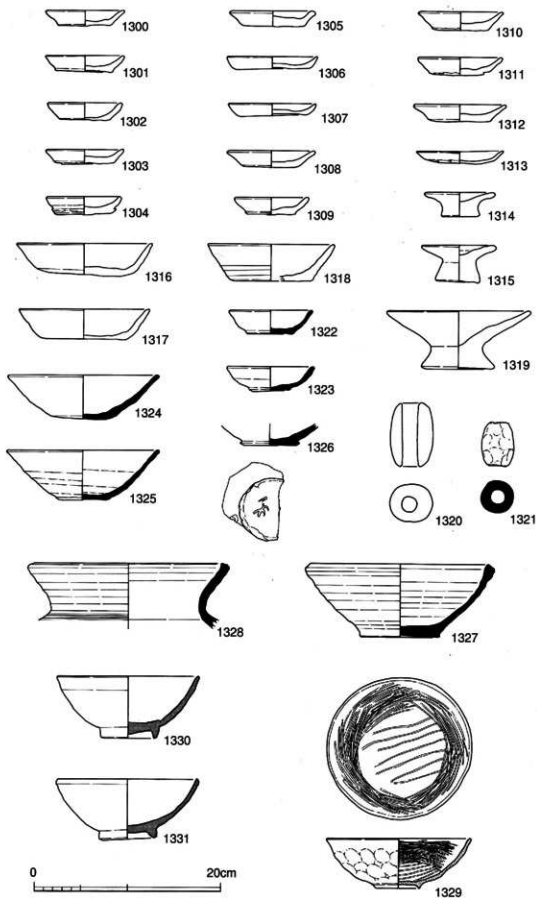
1326は、底部以上は欠損しており器形は判然としないが、恐らく浅めの碗若しくは皿と考えられる。底部は回転ヘラ切りの後にナデ調整で仕上げる。底部付近には、ヘラ切り時の段を残す。また、底部には読み方不明ながら墨書を残す。

#### 須恵器鉢 (1327)

器形は、厚手の底部からやや内彎気味に開き、薄手の体部から口縁部で大きく肥厚し、端部外側で面を成す。底部は回転糸切り痕が残り、体部は外内面は共に回転ナデ調整を施す。

#### 須恵器甕 (1328)

全体の器形は、口縁部以下が欠損しており不明である。後の緩い屈曲からやや外反しながら開き、口縁端部で内彎で微妙につまみ出し、上端部で面を成す。器面調整は、外内面共に回転ナデ調整で仕上げるが、口縁部外面の屈曲部付近では直線の欄目文が見える。また、内面には自然釉が付着する。



第344図 中世土器・土製品

### 第3節 土器

#### 瓦器椀（1329）

1329は、S E 001出土のものである。内彎気味に立ち上がる体部には、底部に断面三角形の状の高台を貼付する。口縁部はやや外反し、口縁端部は上端部で微妙に面を持ちながら丸くおさめる。体部外面は、指押さえの痕跡が顕著に残り、それによって器面の凹凸も顕著である。体部内面は圓線状のヘラミガキを施し、見込み部には、やや歪んだ平行線状の暗文が施される。

#### 白磁碗（1330・1331）

1330もS D 001出土の白磁碗である。体部は、やや内彎気味に立ち上がり、口縁端部は外面のナアにより若干外反し、丸くおさめる。見込み部分には沈線状の段を有し、底部には1331に比して細身で直立する断面逆台形状の高台を付す。体部外内面には、微妙に黄味がかかった灰白色の施釉がされ、微細な貫入がある。形態等の特徴から横田・森田分類白磁碗Ⅱ類の範疇に入るか、若しくはそれに近似するものと考えられる。

1331は、S D 001出土の白磁碗である。体部は、やや内彎気味に立ち上がり、口縁端部において小さな玉縁状の成形を施す。見込み部分には段を持たず、底部には断面逆台形状の高台を付す。体部内外面には、微妙に黄味がかかった灰白色の施釉がされ、微細な貫入がある。形態等の特徴から横田・森田分類白磁碗Ⅱ類の範疇に入るものと考えられる。

## 第4節 金属器

(深江)

個遺跡における出土金属器は、殆どが北区からの出土である。出土したものの多くは遺構との共存関係を持たないことから、時期を確定するのは困難である。

M1は一端が欠損しているため、全体の形態は不明である。現状長は5.3cmで、原形を止める一端は屈曲している。断面形は、縦0.4cm×横0.9cmを計る長方形状を呈している。状況からは、鉄製の釘と考えて良いであろう。

M2は両端が欠損したもので、現状長3.2cmを計る。断面形は、一辺がそれぞれ約0.6cmを計るほぼ正方形状を呈する。鉄製の釘の一部と考えられる。

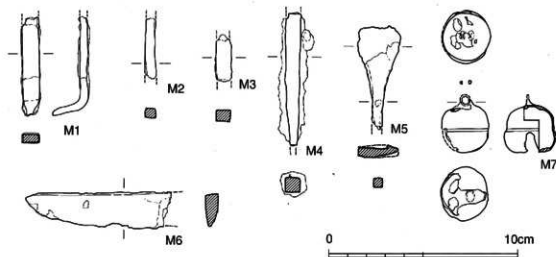
M3も両端が欠損している。現状長2.5cmを計る。断面形は、縦0.6cm×横0.8cmを計るやや台形気味の長方形状を呈する。鉄製の釘の一部と考えられる。

M4も両端部が欠損している。現状長7.0cmを計り、外見は錆で覆い尽くされ形状が判別出来ない。断面形は、最も厚身のある一端で、一辺がそれぞれ約0.8cmを計るほぼ正方形を呈する。また、もう一端の部分に向かって先細りになっていくため、大型の鉄製の釘か、若しくは有茎鉄鍔の鐓代の一部と考えられる。

M5は、平面形が鐓状の工具を思わせる形態を呈する。一端が欠損しており、現状長5.5cmを計る。幅広の一端は剥離しているが、幅約2.5cmを計り、断面形は厚み約0.6cmのやや膨らみのある長方形である。もう一端の断面形は、一辺約0.5cmの正方形である。平面形態から鉄鍔の一部であろうと考えられる。

M6は、一端が欠損するものの、その平面形態からは鉄製刀了の一部と判断出来る。現状長7.8cmを計る。断面形は、鍔の部分の幅約0.7cm刃部までの長さ約1.7cmの直角三角形状であり、片刃ということが分かる。また、刃部の一部には欠損した箇所があり、錆の付着度が周辺と同様の状況である事から、使用時に刃こぼれを起こしたものと考えられる。

M7は、銅製の小型の鈴である。基本形態は球形であるが、鈴身の中心にくびれを持ち、くびれを中心とし下半部が上半部よりも作りが大きく、下膨れ状の形態を呈する。鈴身は内部が空洞であり、下平



第345図 中世金属製品

#### 第4節 金属器

部裾には細長い孔を設ける。細長い孔側を側面とした時の身の幅は約2.5cmあり、正面とした時の幅は約2.8cmを計る。身の厚みは、最も厚い箇所約1.5mm、薄い箇所約0.5mmを計る。身の約3分の1は欠損しており、内部の珠等は見当たらなかった。また、天井部には上部を欠損しながらも内径約4.0mmの鈕があり、身に後で接着したらしく、身の内部に接合痕が確認出来る。鈕付近の外内面には、付着物も認められる。出土が包含層中であり、時期不明ながら、その形態等は近現代のものに近いため、少なくとも中近世を上らないものと考えられる。

M8は、北区の北西側の個濤で出土した銅製の占銭である。部分的な欠損は見られるが、ほぼ完形のものである。直径は2.4cmで、中央の方形の通し孔は一辺0.7cmを計る。外区は幅約0.2cmの縁取りを持ち、全体のに文字面に向かって反った形態を呈している。文字面は、腐蝕等によりやや状態の悪い部分もあるが、「皇宋通寶」と読める。皇宋通寶は、初鑄年代1039年の北宋銭であるが、北区を中心とする中世遺構に関連するならば、年代的にも比較的近いものと考えられる。しかし、如何せん出土層位が明確でない事から、遺構との相伴関係は断定出来なかった。また、北宋銭自体が模鑄銭等と混在しながら近世でも流通しており、本遺物も鑄上がり状況から模鑄銭の可能性のある事を考えると、時期の確定は非常に困難と考える。



## 第5節 木製品

(深江)

遺跡の出土の中世の木製品は、全て井戸（SE001）から出土したものである。

W14～W17は井戸の部材に当たる横棧である。横棧のタイプには、四隅に柱を持つものもあるが、この井戸の場合は、検出時に柱が検出されなかった事から、横棧同志で組み合わせ、縦板の一部で固定したものと推測される。

W14は、部材の両端各々の中央に抉りを入れる、二枚ほどの横棧である。全長97.5cmで、断面形は最大幅6.4cm×厚さ3.8cmの長方形を呈する。部材の表面には加工痕が数箇所残る。

W15は、部材の両端各々の中央に抉りを入れる、二枚ほどの横棧であるが、その内一端のほぞは欠損している。全長95.6cmで、断面形は最大幅6.7cm×厚さ4.4cmの長方形を呈する。部材の表面には加工痕が数箇所残る。

W16は、部材の両端各々の中央を削り残す、目違ほぞの横棧である。全長96.2cmで、断面形は最大幅4.4cm×厚さ3.9cmの台形を呈する。部材の表面には加工痕が数箇所残る。また、中程には長方形の貫通しないほぞ孔が穿たれる。

W17は、部材の両端各々の中央を削り残す、目違ほぞの横棧である。全長96.7cmで、断面形は最大幅5.3cm×厚さ3.8cmの長方形を呈する。部材の表面には加工痕が数箇所残る。また、中程には長方形の貫通しないほぞ孔が穿たれる。

W16とW17は、ほぞ孔を向かい同志に組み合わせる事で、突っ支い棒をわたして、横棧の補強をしたものと考えられる。

W18～W23は井戸の縦板である。

W18は、全長52.4cmで、最大幅39.3cmを計る長形状を呈し、厚さ3.1cmの大型の部材であるが、両端部の欠損も激しく、何らかの部材からの転用と考えられるが、判然としない。

W19は、全長27.5cmで、最大幅7.5cmを計る長形状を呈し、厚さ1.0cmの薄手で細長い板である。部材の一端は欠損しており、本来の長さは不明である。

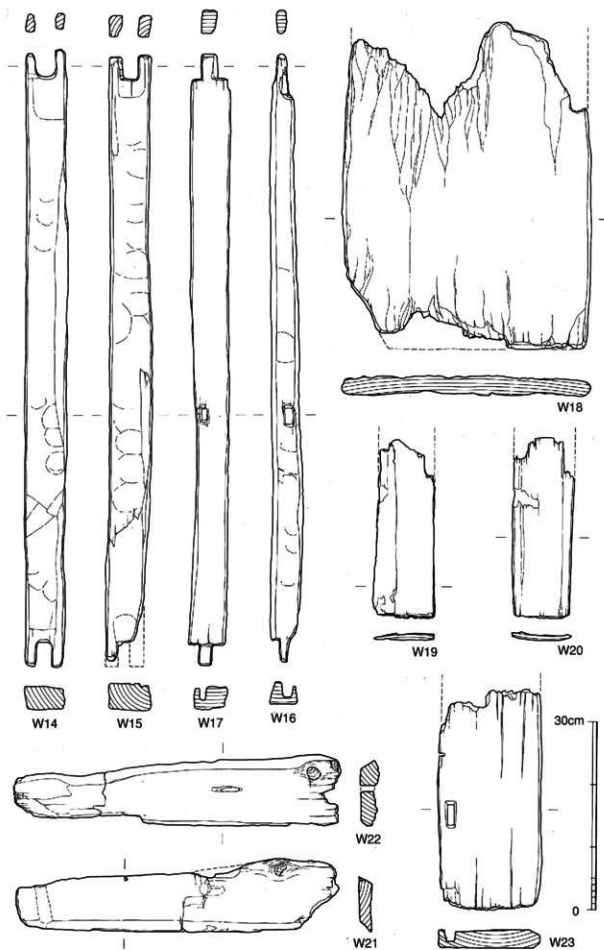
W20は、全長29.1cmで、最大幅9.5cmを計る長形状を呈し、厚さ1.4cmの薄手で細長い板である。部材の一端は欠損しており、本来の長さは不明である。

W21は、全長51.1cmで、最大幅10.2cmを計る。やや先細り気味の細身の台形を呈し、厚さ3.0cmの厚手で細長い板である。部材は両端共に欠損しており、本来の長さは不明である。また、中央に貫通する長楕円形の孔を有すが、人為的な穿孔かは判別が困難である。

W22は、全長51.0cmで、最大幅8.5cmを計る。やや先細り気味の細身の台形を呈し、厚さ2.1cmの厚手で細長い板である。部材は両端共に欠損しており、本来の長さは不明である。また、断面形が平行四辺形状に加工された端部に貫通する円形の孔を一箇所有し、人為的な穿孔と考えられるが、機能的な部分については不明である。

W23は、全長35.4cmで、最大幅16.2cmを計る長形状を呈し、厚さ2.9cmの厚手で板である。部材は一端が欠損しており、本来の長さは不明である。また、中程の端よりにやや逆台形状に加工された貫通しないほぞ孔を穿ち、またその同側面に長さ0.9cm、幅0.5cmの長方形の抉りが入る。用途は不明だが、他の部材からの転用材と考えられる。

第5節 木製品



第346図 中世木製品

# 報告書抄録

ふりがな	つくだいせき								
書名	佃遺跡								
副書名	本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告								
シリーズ番号	第176冊 第1分冊(本文編) 第2分冊(自然科学・総括編) 第3分冊(写真図版編) 第4分冊(レファレンス編-佃遺跡のすべて-)								
編著者名	吉田 昇、深井明比古、藤田 淳、山本 誠、多賀 茂治、深江 英憲、岡田 憲一 前田 保夫、檀原 徹、佐藤 裕司、松下まり子、南木 睦彦、宮路 淳子、松井 章 片山 一道、南川 雅男、伊東 隆夫、渡辺 誠、西田 史朗、藁科 哲男、成瀬 正和 中野 益男、中野 寛子、長田 正宏、桑川 旭、株式会社地球科学研究所								
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所								
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2-1-5 電話078-531-7011								
発行年月日	西暦1998年(平成10年)3月31日								
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
つくだいせき 佃遺跡	ひょうごけん 兵庫県	28686	930022	34°	134°	1989.8.28 ～ 1989.12.20	1次 112m <sup>2</sup>	本州四国連絡道路(神戸・鳴門ルート)建設	
			遺跡調査番号						
	つなごん 津名郡	890064	32°	59°	1991.8.26 ～ 1992.3.19	2次 3,477m <sup>2</sup>			
			ひがしあわじ 東浦町	910064	11°	26°	1992.4.30 ～ 1992.11.5		3次 1,432m <sup>2</sup>
							うらふらび 浦字佃		
594他									
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
佃遺跡	縄文:集落	縄文時代 中期	縄文時代 中期: 竪穴住居跡、焼礫集積炉	縄文時代 中期: 縄文土器、石器	縄文時代後期を中心とする集落遺跡。縄文時代の住居、貯蔵穴、木道など遺構面4面を検出。				
	弥生~奈良:流路	縄文時代 後期	後期: 住居跡、貯蔵穴、木道、落とし穴	後期: 縄文土器、土偶、打製石器類、石剣類、石皿類、サヌカイト素材、丸木舟(木道に転用)、木製鉢、編物、動物骨、種子類	弥生~中世は2面を検出。 遺物は縄文土器、石器、木器、自然遺体など28リッター入りコンテナ800箱。縄文後期中業~後期土器編年実施。				
	古代末~中世	縄文時代 晩期	晩期: 住居跡、建物跡、埋蔵、土墳墓、石器素材集積土坑、溝	晩期: 土器、土偶、打製石器類、サヌカイト素材、石刀	縄文時代の丸木舟、石器素材や他地域土器の出土から広域交流拠点集落と考えられる。				

---

---

兵庫県文化財調査報告 第176冊

## 佃遺跡

—本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ—

第1分冊 本文編

1998年（平成10年）3月31日 発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所  
神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

〒652-0032 TEL078-531-7011

発 行 兵庫県教育委員会  
神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

〒650-8567 TEL078-341-7711

印 刷 (株)関西廣濟堂 神戸支店  
神戸市灘区泉通6丁目2番15号

〒657-0834 TEL078-801-4314

---

---

兵庫県津名郡東浦町

## 佃遺跡発掘調査概要

兵庫県南部の淡路島で西日本最大級の縄文遺跡

多量の遺物により縄文後期半葉から晩葉の土器盛年実施。

科学分析から当時の自然や生活、交流の実態が利用状況の考察



# 佃遺跡 のすべて

TSUKUDA SITE

1998年

兵庫県教育委員会

縄文後期半葉から晩葉の土器盛年実施



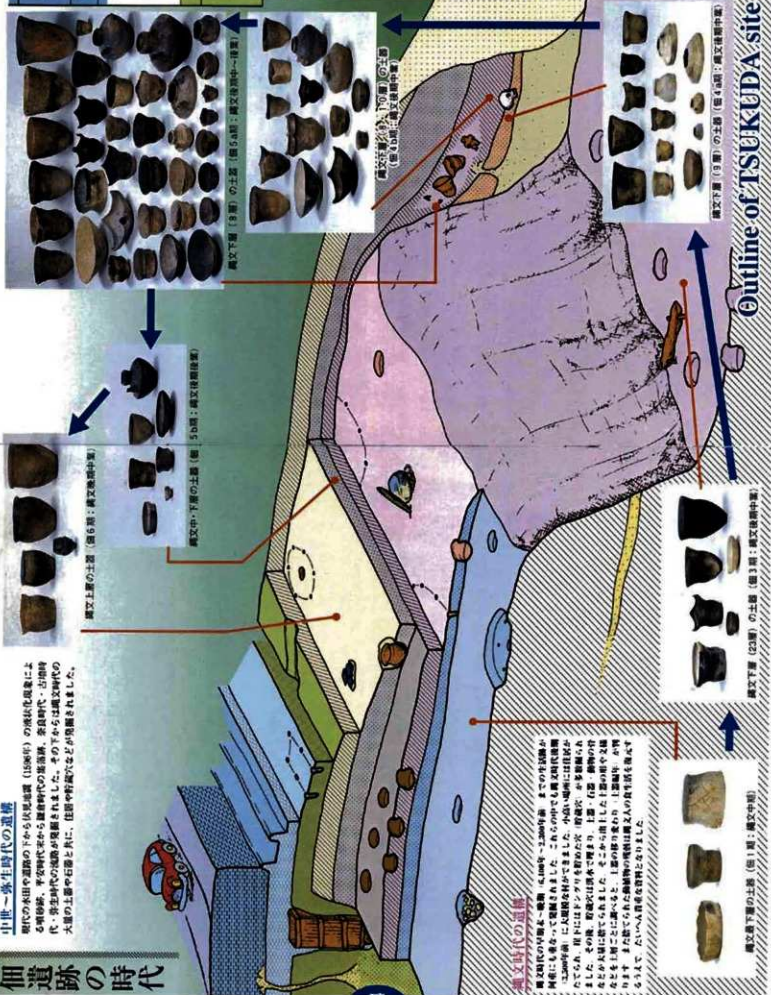


# 個遺跡の時代

## 中世・弥生時代の遺跡

現代の本田や温帯の下から伏見遺跡（1500年）の縄文化現象による縄文時代、平安時代から鎌倉時代の遺跡群、奈良時代・古墳時代・京生時代の流れが展開されました。その下からは縄文時代の土器や石器と共に、住居や軒瓦などが発掘されました。

1600年	縄文時代
1400	縄文時代
1200	縄文時代
1000	縄文時代
800	縄文時代
700	縄文時代
600	縄文時代
500	縄文時代
4000	縄文時代
3000	縄文時代
2300年	縄文時代
2000	縄文時代
1000	縄文時代
500	縄文時代
0	縄文時代



縄文下層 (18層) の土器 (図5A層：縄文後期中～後葉) / 縄文下層 (18層) の土器 (図5A層：縄文後期中～後葉)



縄文下層 (18層) の土器 (図5A層：縄文後期中～後葉) / 縄文下層 (18層) の土器 (図5A層：縄文後期中～後葉)



縄文上層の土器 (図6層：縄文後期中)



縄文中層の土器 (図5B層：縄文後期中)



縄文下層 (18層) の土器 (図4A層：縄文後期中)



縄文下層 (23層) の土器 (図3層：縄文後期中)



縄文下層の土器 (図1層：縄文中期)

縄文時代の中期～後葉、約1500年～1000年前までの生活様式が明らかになってきました。これらの時代でも縄文時代生活様式が継続していましたが、この時代には土器の材料が変化しました。小石や砂には貝殻が多用されました。その結果、貯蔵容器は水で腐りやすくなり、土器・石器・骨物の作りかたも大きく変わりました。そこから出た土器の形や文様なども土器ごとに異なり、土器の作りかたから、土器編年が可能になります。また、この時代の遺跡からは縄文人の生活様式が明らかになり、縄文時代の生活様式が明らかになりました。

## Outline of TSUKUDA site



縄文時代後期のムラの様子（東浦町史から）

**ム** ラは海岸寄りの高台に5~10棟の住居が建てられ、その周りには食糧を貯める穴がたくさん造られました。

**住** まいは地面を浅く掘りくぼめ、地面に柱を埋めて、住居の周りにカヤをふいた簡単なものでした。

縄文時代中期の竪穴住居跡

**墓** 縄文時代後期の墓は見つかりませんでしたが、晩期では地面に穴を掘り、遺体をそのまま穴に入れた「土坑墓」や、小さな子供を土器に入れて葬った「土器棺」が発見されました。しかし、お供え物は出土しませんでした。

縄文時代晩期の土器棺・土坑墓







Pottery and Tools

煮炊きに使われた縄文土器



サヌカイト製石器の原材料とそこから割られた剥片や製品

**土** 器は食べ物の煮炊き、貯蔵、盛りつけなどに欠かせません。粘土を巻き上げ、全体を形づくった後、表面に縄をころがしたもや棒で線を描いて文様をつけたものがあります。土器の形や文様は時代が経つごとに微妙に変化しているので、時代を判断する材料になります。

**狩** 猟の「弓矢」、木を倒す「斧」、木の実をすりつぶす「磨石や石皿」、祭りに使う「石剣・石刀」「石棒」など数多くの石器が使われます。石器の材料は四国の香川県や大阪府と奈良県の境付近からも運ばれました。また木製の鉢や皿などの食器や容器をはじめ、丸木舟などの大型品も木を彫りくぼめて作られました。

縄文時代後期の土器たち

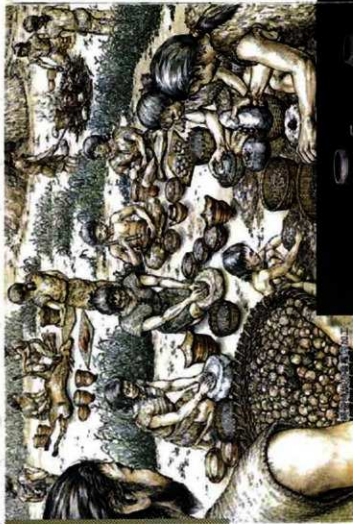


Life of Jomon people



縄文時代の“まつり” (イメージ)

祭 石器が広範囲の各地に流通している。長35cmの短冊状の柄は実用的といえませんが、これは縄文の風習として狩りなどで使われたものと考えられます。本器の刃先からは土器も出土しました。本器の例は既述する35cmのものですが、全体が類似しているのは「まつり」・「狩り」などの風習でこころなからしめません。



食糧

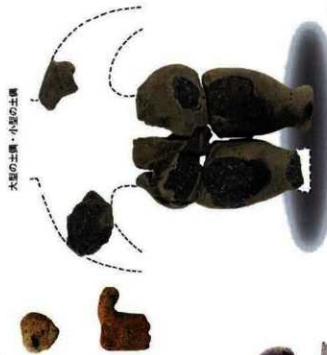


縄文時代後期の注口土器

食 器にはフナクリやその他の種子類が盛り込まれ、調理されました。その器、釜にもなる「ゴボウ」、薪の材料になる「ニワトコ」など、50種類もの種子類が混ざりました。動物食糧としては「シロ」「イノシシ」が多く、「イルカ」「クワ」なども出土しました。魚類には「アロウ」「ガン」「サメ」など、鳥類には「エサキ」「マイ」などがあります。当時の自然豊かな環境の風習が感じられます。



Food 縄文時代の生活空間



大型の土偶・小型の土偶



シカ・イノシシの骨



イルカの骨





(縄文時代後期の貯蔵穴から出土したイチイガシの実)

長崎県文化財調査報告 第476号 縄遺跡 - 第4分冊 - レファレンス編 1996年

